

福竜丸だより

都立・第五福竜丸展示館ニュース

発行
(財)第五福竜丸平和協会
〒136 東京都江東区
夢の島3-2
都立第五福竜丸展示館内
電話 03-3521-8494

「はやぶさ丸解体」取材

米田伸

取材のキッカケはマリアナ海難であった。台風二十九号をマリアナ群島アグリカン島に避けた静岡県のカツオ・マグロ漁船七隻が沈没、死者・不明二〇九人、日本の漁船遭難の記録としては最大の被害であった。

空や海から大がかりな捜索が行われたが、突発事故で船自体が転覆したり沈んだりしても、自動的に開く構造になつている筈の救命ボートが中々発見されない、という疑問が出てきた。東京水産大学の専門家などが問題点解明のため、房総沖の東京湾で救命ボート上保安装置の取材をカバーしていった私は同行取材をした。

私たちが乗っていた船と並んで漁船が走っていた。『米田さん、あれが第五福竜丸ですよ。今は水産大学の実習船ではやぶさ丸といいますがね』船長がつぶやくように教えてくれた。NHK入社後、私の最初の赴任地は静岡送局、当時、記者クラブには福竜丸事件の取材に追われた他社のベテラン記者が何人かいて、よく取材の苦労話を聞いていた。また高校生の時に、故木村健二郎博士にお会いする機会があり死があつたが、その時は、二度目のお勤め

米田伸

二年近く経った。昭和四二年六月、

中国が水爆実験に成功したというニュース

を世界をかけめぐった。米・英・ソ

に続き四番目の水爆保有国になった

である。その前の年に行われた中国の核実験では、新潟や東京で放射性巨大

粒子が検出されたりして大きく報道さ

れていた。

私は社会部遊軍席にいた。内外で大き

きな出来事があつた場合、関連のコメ

ントや解説、談話取材をするのが役割

のひとつである。のちに「ニュースセ

ンター九時」のキャスターをつとめた

勝部領樹記者がキャップ。「何か関連

のニュースないのか」といかつい顔が

催促していた。ふつと東京湾でただ一

度だけ見たはやぶさ丸を思い出した。

東京水産大学にすぐ電話をした。

「船の耐用年限が切れ、廃船になりま

した。越中島の会社が処理をしている

はずです。もう解体されてしまったか

も知れません」。同僚の法田忠昭カメ

ラマンと飛んで行った。船は会社近く

の運河につないであつた。働き場所を失つたせいか船体がひどく汚れて見え

イギリスのテレビ局取材

四月二十三日、イギリスBBC放送の取材が行なわれ、第五福竜丸乗組員の池田正穂さんと大石又七さんが展示館で体験を語りました。BBCが二十世紀の歴史的出来事を三十近いテーマで構成するドキュメンタリー「ビープルズ・センチュリー」の第十四作で、題名は「フォールアウト」。広島・長崎の被爆から第五福竜丸の被ばくへとたどり、各地の核実験被害の実態を告発しつつ、死の灰による人類絶滅の危機を描くという意欲作とか。撮影は夕方から船の甲板で行なわれ、静まり暗くなつた

米田伸

館内に第五福竜丸を浮き上がらせ

て池田、大石氏、それ一時間余、

プロデューサーのチャーレズ・ブ

ルノーさんのインタビューを受け

ました。

この日、池田さんは焼津から車で夫人と息子さんの妻子とともに来館。「もう十年近くになる」と久しぶり対面した船をお孫さんの手をひきながら一巡し、来館中の人々にも気軽に事件当時の様子を語りました。番組は来年夏、広島・長崎被爆五十年にあたつて世界各

地で放映とのことです。

平和行進出発

五月七日、核兵器廃絶、被爆者援護等の課題をかけて、一九九四年国民平和大行進(同実行委員会主催)が第五福竜丸展示館前で出発集会を開き、広島に向かいました。また、八日には日本生協の平和行進、日本山妙法寺の平和祈念行脚も展示館前で集会を開き、広島へ向け出発しました。おりから、久保山愛吉記念碑横には、昨年九月亡くなった久保山すずさん(英機)が消えて英樹(東条)が現れたたは「お詫びと訂正」前号一面連載「核兵器の廃絶と国際法(⑤)」の四段目11行「秀樹(湯川)が消えて英樹(東条)が現れたたは」は「お詫びと訂正します。」の誤りでした。お詫び申し訳ござります。



展示館前から出発する日本山妙法寺の平和祈念行脚

たのを覚えていた。数人の作業員が槌やハンマーを振っていた。船の外見はそのままだが金属類や真鍮めいた内部の金具などはもう大半が取りはずされていた。操舵室の舵輪はまだ残っていた。作業員たちは事情がよく判らないらしかった。黙々と「はやぶさ丸解体」に取組み、私たちも黙つてその模様をフィルムにおさめるしかなかつた。原水爆禁止運動の故安井郁氏に取材し、「福竜丸の記念に舵輪だけでも残して欲しい」という感想をつけ原稿をまとめた。改めて日時を確認してみた。「はやぶさ丸解体」のこのニュースは、当然に取組み、私たちも黙つてその模様を撮影していく。

「第五福竜丸廃船」のタイトルで、六月二三日夜七時のNHKニュースで放送されている。約一分の長さのフィルムはそのままNHKに残されている。ぼんやりした記憶だが、翌年三月『赤旗』に「福竜丸廃船」の記事がのつた。また、第五福竜丸平和協会の資料によると同年の三月十日に、解体後、夢の島に捨てられた福竜丸の保存を訴える投書が『朝日新聞』に掲載された。市民の保存運動が大きく広がつていつたかどうかは判らない。ただ、第五福竜丸が「はやぶさ丸」と名を変え、再び福竜丸に復活、保存される間のごく小さい一点を取り放送したこと、被爆四〇年という節目に書いておきたい、と思った。

(元NHK記者)



第五福竜丸展示館で語る島原スミさん (1994年3月17日)

私は昭和十八年春、夫の転勤で神戸から東京の麻布に引越してきましたが、その年の暮に夫が召集されましたので、麻布から荻窪に移り住みました。当時の荻窪は学

者や文化人、退役軍人、余生を送るかっての会社員等が住む静かな町で、水のとてもおいしいところでした。幸い、戦災には会わずに終戦をむかえることができました。

長い戦争から解放されたよろこびは、又格別でした。間もなく、戦争放棄を宣言した平和憲法が制定され、これから日本は文化国家として生まれ変わるのだと信じていました。当時はまだ、きびしい約束される事を信じ、占領下で、衣食住もままならぬ苦しい毎日でしたが、明るい未来が暮らしていました。

ところが、その頃の世界情勢は、米、ソの対立がはげしくなり、

ビキニ事件にかかわった三人の女性の証言——第一回
読書会も署名も生まれて
はじめての経験でした：

杉の子会 島原スミさん

遂に朝鮮戦争が起こり米軍基地としての日本の役割が強化され、當時、私共庶民の一番待ちのぞんでいた、かつての交戦国との全面講和条約は実現せず、アメリカとの単独講和条約、中、ソを仮想敵国とした日米安保条約が締結されなど、又々再軍備への道が進められる気配に私共は非常な不安を感じました。

ちょうどその頃、法政大学教授の安井郁先生は、杉並公民館の館長として、地域の平和運動に献身的なお力を注いでいらっしゃいました。大きな集会は勿論のこと、どんな小さい平和集会、P.T.A.の集会にも、杉並だけでなく三鷹あたりまでお気軽にお出かけになりすすめられて、一緒に小学校の教室で開かれた夜の平和集会に出席し、日米安保条約に関するお話を感銘ふかく伺いました。私も息子にお話を下さいました。私も息子にそれを聞いた主婦たちは、真剣に平和問題を考えるようになり、再びあくるしかった戦争体験はしたくな

い、子供を戦場へおくる過ちを犯してはならないという主婦達の声



署名をすすめる島原さん (1954年)

水爆プラボー実験から四〇年目の事実（一）

死の灰はマーシャル諸島のほぼ全域に及んだ

豊崎博光

「実験の六時間前に風がロングラップ島に向かって吹いていたことを知っていたのに、なぜ実験を行つたのだろうか。六時間あれば私たち全員を避難させることができたし、死の灰をあげせられることもなかつたと思う」。



水爆プラボーのクレーター

二月二十四日、ワシントンで開かれた米議会の公聴会で、アメリカが、風がロングラップ島の方向に吹いていたことを知りながら水爆プラボー実験を行つたことを認めめたというニュースが伝えられた時、ロングラップ島の被曝者のひとりアイゼン・テマ（四十二歳）は顔を曇らせていった。

アメリカはこれまで、ロングラップ島とウトリック島の住民が水爆

プラボーの死の灰をあげたのは、

爆発直後に突然風向きが変わったからという「事故説」を主張してきました。しかしこれが事実でないことは、八〇年代前半に公表した機密解除文書に書かれていた。さら

にアメリカは、マーシャル諸島におけるすべての核実験の詳細やマーシャル諸島の島じまへの影響などを文書も機密を解除し公表しています。公表はひつそりと行われたため一般的にはほとんど知られず、

公表文書の全容が判明したのは最近になってからである。

まず、ビキニとエニウエトク環礁で一九四六年から五八年まで行われた核実験の回数は総計六十七回（従来は六十六回）で、うち水爆実験は十七回（同、三回）。合計の爆発威力は広島型原爆に換算して七千キロ以上にのぼるものであつた。

またアメリカは、マーシャル諸島で核実験の影響を受けたのは実験場とされたビキニ、エニウエトク環礁と水爆プラボー実験の死の灰をあげせられたロングラップ島とウトリック島の四島だけであるといつてきました。しかし公表した文書では、水爆プラボー実験の死の灰は西隣のミクロネシア連邦のコラエ島とポンペイ島を含めマーシャル諸島のほぼ全域の島じまに及んだことを認めている。

とくに注目されるのは、ロングラップ島は水爆プラボー実験前に二回とその後に五回、ウトリック島はプラボー実験前に一回とその後に一回核実験の死の灰にみまわれ、両島の住民は何度も被曝させられていた。

水爆プラボー実験から四〇年目

にあたる今年の一月までに、ロングラップ島被曝者八十六人（胎内被曝者四人）のうちすでに三一人

が、またウトリック島の被曝者百六六人（胎内被曝者九人）のうち

七十六人がガンなどで亡くなっ

いる。ロングラップ島の人々は一九八五年、残留する死の灰から逃れるために故郷の島を離れクワジエレン環礁北西端のメジャト島に移

住したが、いまなおガンや甲状腺の病気に苦しめられている。ウトリック島には現在約四百人の人々が住んでおり、人々の間ではロングラップ島の人々と同様にガンや甲状腺の病気が多く見られるとい

う。

核実験が終了してから三十八年、水爆プラボー実験から四〇年目を迎えたマーシャル諸島だが、人々の間にはいまなおガンや甲状腺の病気の発病が絶えず、それらは核

実験の死の灰の影響によるものと人々は信じている。

アメリカがマーシャル諸島の島じまへの核実験の影響を認めたこ

とは、マーシャル諸島の人々に様々な波紋をよんでいる。

（フォトジャーナリスト）